

まるごとの子供理解

かつてのA校長先生は、毎日のように授業中、教室を回られ、「先生がしゃべり過ぎ、子供を信じて待ちなさい。」「先生が発言を繰り返すから、友達の発表を真剣に聞かなくなるのよ。」「〇〇さんの本当に言いたかったのは違うのでは？」などと、具体的に指導してくださった。また、子供の言葉足らずの発言に対して、「待って。もう少し詳しく話してごらん。」「それは見たこと、それとも考えたことなの？」「□□さん、あなたは△△さんの発言をどう聞いたの？」と、時には直接子供に問い返されることもあった。6年生が全校ダンスを照れくさそうにやっていると、「6年生が本気を出さないで、誰がついてくるか。」と、顔を真っ赤にして叱咤激励されることもあった。

このように、真剣に教師や子供に指導される校長先生なのに、なぜ？と、不思議に感じる出来事があった。それは、3年のB児への対応である。彼は遅刻の常連で、授業中は寝そべったり、担任に悪態をついたりする子供であったが、何と、校長先生は、時々、彼をにこやかに校長室に招き、温めた牛乳を飲ませたり、クッキーを食べさせたりされたのだ。そんなことが繰り返されるうちに、彼は自分から校長室を訪れ、笑顔で教室に戻るようになり、結果的には、徐々に落ち着いて学習に取り組むようになったのだ。

校長先生は、ある時こう話された。「人はみんなよくなりたいと思っている。だから、頑張れることは、本気で頑張らせなさい。けれど、人には自分ではどうにもできないこともある。彼だってそうだ。（両親は、夜遅い仕事で、朝起きてこない。）朝食抜きの状況をすぐには改善できない。自分で起きて学校に来るだけでも立派だ。まずは、それを認めてやりなさい。何でもただ頑張れというだけではなく、その子に合わせた対応をすることが、その子にとって価値ある支援に繋がるのだ。」と。

そういえば、校長先生は、雨の日も雪の日も、毎朝子供を校門で迎え、声を掛けておられた。担任のように、目の前の一人一人をよく知っておられた。まるごとの子供理解に努めることが、適切な対応の前提となっていたに違いない。